

# 岡本唐貴《(春の畑)》《(白菜の収穫)》の修復報告

新潟市美術館 石垣 雅美

## 1. はじめに

新潟市美術館では、平成23年度に所蔵品である岡本唐貴の油彩画2点《(春の畑)》《(白菜の収穫)》の修復を行った<sup>1</sup>。

この度の修復作品は、岡本や新潟県村上市出身の矢部友衛と親交があり、彼らの活動を支援していた新潟市の実業家 小林力三氏（1907-2006）のコレクションで、1995年に小林氏からの寄贈された作品（油彩画173点、デッサン80点）のうちの2点である。この収蔵を記念し、当館では1996年4月12日～5月12日の会期で、企画展「収蔵記念 矢部友衛と現実会の仲間たち展」を開催し、165点を展示した。

1 《(春の畑)》《(白菜の収穫)》とも作品名の由来は不詳。

## 2. 小林力三コレクション

小林氏は旧制新潟高校入学後、結核にかかり一年で退学。20歳前後に静養していた頃、坂口安吾の兄で当時の新潟新聞（現新潟日報）社長の坂口献吉宅に出入りしていた際に矢部友衛や岡本唐貴と出会い、つきあいが始まった。当時、矢部や岡本を支援していた新潟市の弁護士 長谷川寛に影響を受けてか、昭和初期以降は家業に専念しながらも、彼らが新潟で活動する際に自宅に泊め、個展を開催できるよう関係者を紹介するなど支援を続けていた。

岡本らは戦時中から「綜合リアリズム」を提唱し、新しいリアリズム絵画を研究していたが、当時は作品の買い手がつかなかったため、小林が買い取っていた。それにより、小林のもとに作品が集まり、コレクションが形成されていった。

現実会が結成された1946（昭和21）年、東京都美術館で「現実会第一回展」を開催する際、小林は開催費用の工面や、所蔵していた全作品を額装し、会場まで輸送するなど、現実会を全面的に支援している。

小林と現実会のメンバーとのつきあいは、彼らが死ぬまで続き、コレクションは250点に及んでいた。

新潟市は現実会とゆかりある地であった。第一には、坂口献吉や長谷川寛など、矢部や岡本らの支援者がいたこと。特に、坂口は来新時には迎え入れ、1925（大正14）年には新潟新聞社屋にある展示場にて彼らの展覧会「各国新興美術展」（三科主催）を開催するなど援助していた。その縁からか、岡本らは自ら主催した講習会を開くなど、新潟で活動することも多かった。次に、坂口に続く支援者となった小林は、彼らの作品に対する理解も深く、彼らを経済的にも援助していた。そのため、現実会のメンバーは新潟によく足を運んでいた。

小林にとっては思い入れの深いコレクションであるため、所蔵作品が地元に残ることを希望していた。そこで、1995年に当館へ寄贈されることとなった<sup>2</sup>。

2 本項目は、1996年に当館で開催した「収蔵記念 矢部友衛と現実会の仲間たち展 小林力三コレクションから」（会期1996年4月12日～5月12日）の図録に依拠している。（「収蔵記念 矢部友衛と現実会の仲間たち展」、1996年、7-9頁）

## 3. 作家及び作品について

### (1) 岡本唐貴について

岡本唐貴（1903-1986）は岡山県に生まれた後、神戸で育った。1922（大正11）年に東京美術学校彫塑科に入学。この2年前の1920（大正9）年、ロシア未来派の画家ブルリュークやパリモフが来日して各地で展覧会や講演会を開催。多くの若い作家たちが反応した。大正時代以降、ヨーロッパで興った美術が日本に時差が無く紹介され始めた。それに呼応するかのよう、官展である帝展や在野の二科展以外の前衛的な活動をするグループが結成された。

岡本は、美校に在学していた1923（大正12）年に第10回二科展に入選。岡本は二科会の仲間である神原泰や古賀春江らと「アクション」を結成。翌24（大正13）年に、村山知義らが結成した新興美術のグループ「マヴォ」とともに「三科」を結成するが、内部対立により活動期間は短かった。

合同、解散を繰り返して衰退していった新興美術運動に参加していた作家の多くは、次

第にプロレタリア美術運動へと活動の拠点を移していったが、岡本も例外ではなかった。1927（昭和2）年、矢部とともに「造形美術家協会」を結成。1928（昭和3）年に、村山知義らのグループ「ナップ美術部」とともに「第1回プロレタリア美術大展覧会」を開催した。1929（昭和4）年にはこの2グループを中心に「日本プロレタリア美術家同盟」が結成され、労働運動などをテーマにした作品を発表した。未来派やダダなど海外の新しい美術動向の影響を受けて興った「大正アヴァンギャルド」の代表的な作家のひとりとして活動した。

1920年代後半より、矢部らと、ソ連の社会主義リアリズム絵画の影響を受けた自然主義的であり写実的な絵画の研究を始めた。1930年後半から1940年代後半には、長野や新潟において、農村風景や村で採れた野菜、農作業に営む人々を描いた絵画を制作。戦後の46（昭和21）年に、矢部らと「現実会」を結成し、同年の展覧会でこれまで研究していた作品を展示した。しかし、現実会は第2回展覧会の後に解散。

1950（昭和25）年にソ連での日本現代絵画展の開催などに尽力。1967（昭和42）年には日本プロレタリア美術史を共同執筆するなど、プロレタリア美術運動の理論家としても知られている。

ところで、寄贈された岡本作品の約半分は戦前から終戦直後に制作されている。寄贈作品の大半には、絵具の浮き上がりや剥落がほとんど見られない、良好な状態である。しかし、数点については、収蔵当初から、絵具が剥落しているものが認められている。なかでも、当該作品《（春の畑）》《（白菜の収穫）》は、全面的に剥落が確認され、また他の部分で損傷も多く、ちょっとした振動でも絵具が落ちかねない状態であった。そのため、今回修復するまでは、一度も展示することがなかった。



図1 《（春の畑）》修復前（額なし）

## (2) 《（春の畑）》について

1941年に制作された油彩画（図1）。木地額にて額装されているものの、ガラスやアクリルなどのカバーは無い。画像全面に剥落や損傷が多い。キャンバス裏には「岡本」の記入あり。展示記録はなし。描かれた場所は不明。本作品の剥落部分はひとつひとつの面積はそれほど大きくないが、多くの箇所及んでいる。特に左上の剥落が目立つ。

作家名	作品名	制作年	額縁	材料	支持体	号数	天地	左右	厚み
岡本唐貴	（春の畑）	1941年	有	油絵具	キャンバス	15号 F型	530mm	655mm	22mm

## (3) 《（白菜の収穫）》について

F15号の油彩画（図2）。制作年は不詳だが、小林カ三コレクションの殆どが1930年代後半より40年代後半に、岡本らが長野や新潟の農村において作品を制作していた頃の作品であるため、おそらく同時期の作品ではないかと推測される。

《（春の畑）》同様、画面全体に剥落が認められる。また、画面左上には3か所の穴。展示記録はなし。本作品も剥落が広範囲に渡っており、特に、下部の茶色の絵具部分が半分近く剥がれている。

作家名	作品名	制作年	額縁	材料	支持体	号数	天地	左右	厚み
岡本唐貴	（白菜の収穫）	不詳	有	油絵具	キャンバス	15号 F型	530mm	653mm	22mm



図2 《（白菜の収穫）》修復前（額なし）

## 4. 修復方針

後に詳細を述べるが、まず修復研究所21に作品の診断を依頼し、次の3つの処置が必要との見解をもらった。それに基づき、大まかな修復方針を立てた。（なお、以下に続く修復前の状態、修復処置、修復後の状態は修復研究所21の報告書に基づく。）

- 浮き上がり部分の接着
- 剥落している欠損部分の充填及び整形
- 補彩

補彩については、制作当時の現状を留めている写真等の記録があれば、それを基準として補彩できるが、これらの作品にはその記録が存在しないため、まずはどの程度の補彩が可能か確認するところから検討を始めた。

次に、面積の小さな部分及び大きな部分についての補彩処理を検討した。小さな面積の欠損部分には既存の筆触や周囲の色に合わせて補彩。広範囲にわたる部分については、次の2案を検討した。

- 補彩部分がわかるように、グレーなどの中間色一色で補彩。
- 周囲の色調から選んだ中間色でぼかしながら目立たないように補彩。

補彩については、さまざまな方法があるが、今回は(b)を採用した。その理由としては、次のことが挙げられる。

《(春の畑)》《(白菜の収穫)》の2点は、寄贈当時から、絵具の浮きが激しく、全面的に剥落も認められており、展示室に展示することは難しい状態の作品であった。そのため、これまで市民の目に触れることなく、収蔵庫に収納されていた。

修復した作品として展示するのであれば、(a)のように補彩がわかるような中間色一色のみを用いて補彩するのも、ひとつの方法である。

しかし、修復後は積極的に展示活用したいという意図があった。損傷箇所が明らかにわかる統一色による方法では、オリジナルの表現が損なわれてしまう。そのため、周囲の色調にある程度合わせ、補彩箇所もわかるような方法とした。

## 5. 修復前の状態

修復を委託した修復研究所21によると、修復前の状態は以下のとおりであった。

### (1) 《(春の畑)》



図3 《(春の畑)》修復前(額装・表面)



図4 《(春の畑)》修復前(額装・裏面)

- ワニス層：なし<sup>3</sup>
- 絵具層：画面全体に多くの剥落。その周囲では浮き上がりも生じている。絵具層の固着状態が非常に悪い。そのため、小さな振動でも剥落してしまう部分がある。剥落や浮き上がりは、二層目の地塗層の上から生じている(図5)。これは、地塗層と絵具層の固着が悪いためである。浮き上がり部分は、接着が必要。画面の汚れの付着は多くない。側面耳部に、カビ跡がある。
- 地塗層：二層構造である。これらは共に白色。支持体の織りが若干見える程度の滑らかな塗布面<sup>4</sup>。二層目はカンバスを木枠に張ってから塗っているようである。
- 支持体：画布周辺に欠損や耳部の損傷と劣化がみられる。それらはカンバスの張りに影響しているため、補填し、張りを直すことが必要。カンバスに変形が少し生じている(図6)。
- 木枠：厚みが薄い華奢な構造<sup>5</sup>。

3 左記は《(白菜の収穫)》にも共通する。

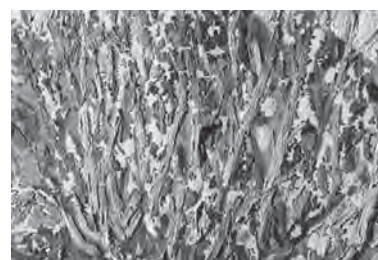


図5 《(春の畑)》絵具層浮き上がり・剥落(左からの測光)

4 左記は《(白菜の収穫)》にも共通する。



図6 《(春の畑)》カンバスの損傷及び変形(左からの測光)

5 左記は《(白菜の収穫)》にも共通する。



6 左記は《白菜の収穫》にも共通する。



図9 《白菜の収穫》 絵具層浮き上がり・剥落



図10 《白菜の収穫》 剥落・亀裂



図11 《白菜の収穫》 側面部(破れ)

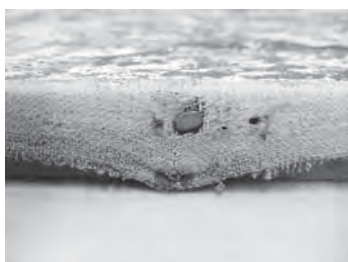


図12 《白菜の収穫》 側面部

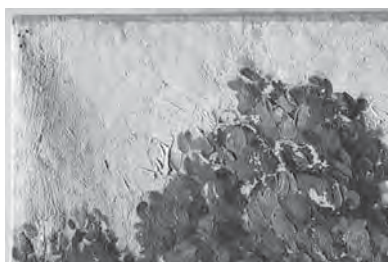


図13 《白菜の収穫》 四隅のしわ(左上)

- 額：作品の寸法に対して額の寸法が小さめで、作品の出し入れ時に負担をかける<sup>6</sup>。特に損傷や汚れはない。

## (2) 《白菜の収穫》



図7 《白菜の収穫》 修復前(額装・表面)



図8 《白菜の収穫》 修復前(額装・裏面)

本作品に特有の状態として、以下を追記する。

- 絵具層：汚れが全体に付着。地塗層との固着が悪く、広範囲で剥落が生じている(図9)。キャンパスの上に塗布された白色塗料(下層)の影響か、地塗層自体の劣化を起因とするのかは定かではない。絵具自体が粉末状になり、脆弱な部分もある(図10)。
- 支持体：上辺と下辺の端には平行して麻糸で麻布が帯状に縫い足され、その上から地塗りが施されているという特徴がある。左右辺は波打つような変形がみられる。経年劣化のため、全体的に茶褐色を帯びている。画布が脆く、四辺は張力がかかるため、所々に破れが生じている(図11)。側面部は釘穴があり、張り直しがされていることがわかる(図12)。画面の四隅に描画後に鉋を刺した跡があり、木枠に張った状態で制作した後に取り外し、別の枠などに固定して保存していたと推測される(図13)。下辺側面部分にカビ跡あり。
- 木枠：右下隅に「一久」の焼き印あり。特に損傷はないが、四隅は材が細く、打ち込まれていた釘穴が大きいため強度が弱くなっている。再利用する場合は釘穴の処理が必要である。
- 額：裏蓋なし。

## 6. 修復処置

### (1) 《春の畑》

《春の畑》における修復処置は、以下のとおりである。

- 浮き上がり接着：額から外す前、膠水7%を絵具層周縁部に細筆で注し入れて固着を安定させる。絵具層の浮き上がり部分に膠水10%を細筆で注し、緩衝材としてシリコンシートをあてがい、電気こてで加温・加圧して接着。同様の工程を数回、繰り返す(図14)。
- 画面洗浄：綿棒に希釈したアンモニア水溶液(0.1%)を含ませ、画面の汚れを除去。
- 裏面清掃・殺菌：裏面の汚れの除去と殺菌を兼ね、ウエスをエタノール水溶液(70%)で湿らせ、裏面及び木枠を拭う。
- 耳補強：画布のふちを補強するため、帯状に裁った麻布の長辺の片端の織りをほぐし、削いで薄くし、側面部裏面側からBEVAシートフィルム(熱可塑性で再加温での取り外し可能)を接着材として使用し、アイロンで圧着(図15、図16)。
- 充填整形：ポローニャ石膏(二水石膏：硫酸カルシウム)と膠水を練り合わせた水性充填剤を剥落部分に詰める。剥落の面積が広い部分は絵具の段差がなだらかになる程度に詰めて、周囲のマチエールに合わせて整形(図17)。

- 防カビ処置：画面の防カビ処置として、チアベンタゾールをエタノールに溶解し、ダンマルワニス（10%）と混合し、画面に塗布。
- 補彩：充填部分と充填できなかった剥落が薄い欠損箇所に修復用アクリル樹脂絵具を用いて補彩。広範囲で欠損している部分は周囲の色調から中間色を選び、目立たない程度に補彩<sup>7</sup>。
- ルースライニング：湿度変化による影響の少ないポリエステル布を予め木枠に張り込み、作品を重ねて張り込む（図18）。画布や絵具の固着に問題がある場合、この処置により、カンバスの動きを安定した状態に保つことができる。
- 支持体張り直し：支持体をもとの木枠に張り込む。釘は金槌で打ち込まずに押し込むことのできる修復用の工具を用いた（図19）。ステンレス製の釘を使用し、画布と接する部分に和紙片を挟んだ。もともとの釘穴に刺し入れ、画布をとめる間隔が広い部分は小鋸を用いた。木枠の釘穴は、あらかじめおがくずと膠を練り合わせたものを詰めた（図20）。
- 保護ワニス塗布：画面の保護と全体の艶の調整を兼ねて、画面全体に、希釈したダンマルワニス（《春の畑》では5%の希釈、《白菜の収穫》では20%の希釈）をコンプレッサーで噴霧。
- 額調整・額装：作品に耳補強とルースライニングを施したため、側面部に厚みが加わった。そのため、額の内側を鑿で削り、余裕をもって作品を額に納められるよう処置。



図14 《春の畑》での浮き上がり接着



図15 《白菜の収穫》での耳補強

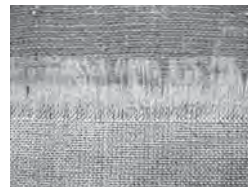


図16 同作品での耳補強（拡大図）

## (2) 《白菜の収穫》

なお、《白菜の収穫》は画布が破損していたため、上記とは異なり、以下の固有の処置を施している。

- 破損部接着：破損部の裏面側から、膠水を含ませた麻糸の繊維を渡して接着。
- 仮張り変形修正：修復用可動式枠に耳補強した作品を張り、少しずつカンバスの変形を修正（図21）。



図17 《白菜の収穫》での充填整形（部分図）

## 7. 修復後の状態

修復後の作品状態は以下のとおりである。

### (1) 《春の畑》修復後



図22 《春の畑》(額装・表面)



図23 《春の畑》(額装・裏面)

### (イ) 《白菜の収穫》修復後



図24 《白菜の収穫》(額装・表面)



図25 《白菜の収穫》(額装・裏面)

<sup>7</sup> 今回は絵具の剥落が広範囲に及んでいることから、オリジナルの表現を修復により損なうことがないように、鑑賞の妨げにならない程度の補彩にとどめた。



図18 《白菜の収穫》でのルースライニング



図19 同作品での作品張り込み



図20 《白菜の収穫》における木枠釘穴充填



図21 《白菜の収穫》での仮張り変形修正

## 8. 修復後の展示への活用

修復終了後の平成24年度のコレクション展Ⅰ「コレクションってなーに？」(会期：2012年4月13日～7月8日)において、「修復された作品」というテーマのもと《春の畑》《白菜の収穫》を展示した。

館の収集方針から、購入、寄贈、寄託など作品収蔵の多様な形態、保存と展示といったコレクション形成とその活用にかかわる美術館の役割を様々な角度から紹介した展覧会である。

本展では、修復プロセスを示すパネルを修復した作品と共に展示した。修復および修復処置は紹介されることが少ない。そして、作品をより良い状態で保存することが美術館の役割のひとつであり、そのために修復することも美術館の仕事のひとつであることを紹介するためである。パネルの作成にあたって、一般的な修復処置を説明することとし、なるべく専門用語を使用せず平易な表現を心がけた。

今回の展示は、修復という仕事をととして、美術館の業務を理解してもらうための一つの方法であった。今後も同様の発信をしていければと考えている。

謝辞：本報告の修復作業にかかる項は、修復を実施した修復研究所21が作成した修復報告書を基に編集しています。また、パネル作成にあたっても監修いただきました。修復研究所21の村松裕美様、関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

(新潟市美術館 学芸員)

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第1号 (平成24年度)  
Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.1

発行日 / 2013年3月25日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL.025-223-1622 FAX.025-228-3051

印刷 / 株式会社 北都

©2013 新潟市美術館・新潟市新津美術館

ISSN 2187-6770